

Title	「ブックトーク」の教育的アプローチによる分析
Author(s)	上原, 明子
Citation	沖縄キリスト教短期大学紀要 = JOURNAL of Okinawa Christian Junior College(49): 127-131
Issue Date	2020-01-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/24651
Rights	沖縄キリスト教短期大学

「ブックトーク」の教育的アプローチによる分析

Analysis of “Book Talk” by Educational Approach.

上原明子
Akiko Uehara

Abstract

With an educational purpose of encouraging ones who perform “Book Talk” to engage in reading, this research note aims at analyzing the possibility of “Book Talk” to be developed into multi-layered language education with such perspectives as “reading education”, “presentation education”, “functional literacy education”.

はじめに

豊かな思考と感性を育むための言語教育は、多層的に行われる必要がある。筆者は、それぞれの教育的アプローチの要に、読書活動を据えるべきではないかと考えている。読書を軸とした多層的な言語教育を構築するためには、なによりも読書のエンゲージメント（読書意欲）を促すことが大事である。しかしながら、大学生の読書実態は、深刻な状況にある。全国大学生生活協働組合連合会が全国の国公立および私立大学の学部学生を対象に実施した「第54回大学生生活実態調査報告書」（2018年）によると、1日の読書時間「0」と回答した大学生は半数近くに上っている。もちろん、読書だけが情報を得る手段ではない。しかし、読書量は、語彙力や思考力の深浅に関係するという見解も無視できない。昨今、読書への意識を高めるための様々な取り組みがなされている。本学でも、プレゼンテーションや読書関連の授業、ゼミ等と図書館が連携した、「ビブリオバトル」¹⁾を行い、学内の読書文化醸成に貢献している。ビブリオバトルは、読書への意識を高め、プレゼンテーション力の育成にも貢献する活動である。筆者は、これまで、ビブリオバトルのプレゼンテーション部分を活用した「ビブリオプレゼン」を講義の中で取り上げてきた。今後、読書を軸とした多層的な言語教育を構築するためには、プレゼンテーションに加え、その他の教育的アプローチを組み合わせることのできる「ブックトーク」に教育的可能性を感じている。

本稿は、ブックトークを行う側の読書のエンゲージメントを促すという教育的目的に立ち、「読書教育」「プレゼンテーション教育」「文章リテラシー教育」「平和教育」の観点から、「ブックトーク」の教育的可能性を分析し、多層的な言語教育へ展開することを目標に据えた研究ノートである。

1. ブックトークの定義と働き

ブックトークについては、様々な定義がなされているが、本稿では東京こども図書館のTCLブックレットによる定義を採用する。東京子ども図書館名誉理事長である松岡享子によると、ブックトーク（book talk）とは、図書館関係者の造語であると考えられるとしたうえで、「ブックトークとは、簡単に定義すれば、ことばの通り、本について話をすることであり、広義に解釈すれば、ある人が自分の読んだ本について友人に話したり、書店でお客の質問に答えて店員

が本の内容を説明したりすることなどを含めて、『本について話す』すべてをブックトークと
 いうわけである。(中略)しかし、図書館で館員の業務のひとつとして、ブックトークと
 いう場合、それは『通常あるひとつのテーマにそって、数冊の本を、順序よく、じょうずに紹
 介すること』を指しており、一定の聴衆を相手に、子どもなら約半時間、おとなならもっと長
 い時間にわたって行われるのがふつうです。」(松岡2018 p.5)という定義がなされている。また、
 ブックトークの働きについて、「実はとりあげる本についての直接の興味だけではなく、関連し
 た本、さらには書物一般についての興味を喚起するという点に、ブックトークの、より大きな
 働きがあるように思えます」(松岡2018 p.6)と述べている。

ブックトークの持つ「本についての話をすること」が、「書物についての興味を喚起すること」
 につながるという特性は、読書のエンゲージメントを促すために有効に働かざるを得ない。そしてそ
 れは、読書活動を要とした多層的な言語教育を構築するための鍵となるのではないかと考える。

2. 教育的アプローチによる分析

ブックトークには、「テーマ選び」と「本選び」(どちらが先でも良い)、「シナリオ作り」、「パ
 フォーマンス」の4つの要素がある。読書を軸とした多層的な言語教育とは、それらの4つの
 要素を、4つの教育的アプローチによって育む教育方法である。ブックトークを行うという、
 タスクベースの教育がなされることにより、それぞれの教育的アプローチが有機的に繋がら
 ないながら、多層的な言語教育を構築されていくのである。

「本選定」は、「読書教育的アプローチ」で育む。たくさんの本の中からテーマに合わせて
 本を選定するプロセスを通じて、学生達は、読書への親和性を深めていく。「テーマ選定」は、
 「平和教育的アプローチ」と関連づけることができる。「他者尊重」という視点に立ったテ
 ママを選定することは、平和観の醸成を促すだろう。「シナリオ作り」は、「文章リテラシー教育」
 として、クリエイティブな発想を鍛えながら、論理的な言葉の組み立て、メイン作品への書評
 的な文章の切り口として、クリティカルシンキングを磨くことにも通じる。「パフォーマンス」
 は、「プレゼンテーション教育」の実践的な部分を鍛える。ブックトークを行う準備として、
 聴衆分析や表現の訓練を行うことで、生きたプレゼンテーション教育となる。

ブックトークを行うという目的に向かって、それぞれの教育的アプローチが有機的に繋がる。
 そのことにより、多層的な言語教育が構築されていくのである。また、ブックトークのタスク
 ベースの教育を行うことにより、それぞれの教育にもアクティブ・ラーニング的要素を組み入
 れることができ、学びの場が活性化され、学びの室や学習意識が高まることが予想される。本
 稿で提案する仮説については、今後、大学における教育実践の中で検証していきたいと考えて
 いる。この言語教育が体系的に構築できれば、おそらく、対象者は大学生だけでなく、広い
 年齢層に対応できると考えている。

3. メイン作品の読み込み方と伝え方

時間と目的により、1冊～数冊の本の紹介を行うブックトークには、メインとなる作品と関
 連した作品がある。メインとなる作品については、書評レベルの読解が求められる。ブックトー
 クに向けてのメイン作品の深い分析に基づく読解と文章表現は、「文章リテラシー教育」のア
 クティブ・ラーニングとなり、単なる文章リテラシー教育を超えていこう。本章では、
 『ジュゴンに会った日』という写真絵本について、筆者の書いた書評(2019年8月4日沖縄夕

イムス掲載の原本)を紹介し、メイン作品の読み込み方、伝え方について考察する。

「人と自然のいのちへの祈り」

「自然は、ただそこにあるのではなく、僕たち人間がそうであるように、小さな生命も、大きな生命も、みんなそれぞれの物語をもっている」。

ソナタ形式（提示部、展開部、再現部、コーダ）で設えられたようなこの写真絵本には、写真家・映像作家の今泉真也の慧眼のまなざしでみつめた人と自然のいのちへの祈りが込められている。24年間撮り続けた写真の全てにいのちの喜びが輝いている。

始まりの提示部は、第一主題である「大浦湾の生き物たちの多様性」が楽しく奏でられたあと、基地問題で分断されてしまった「ひとの営み」が第二主題として静かに問いかけてくる。続く展開部は、ジュゴンに会えることを信じ、海を見つめ続けた「島の時間」。自然の中になると「違うことと、同じこと」その両方を大事にしたくなる…という言葉に、第一主題と第二主題が見事に転調していく。二つの主題が共に主調に置かれる再現部では「僕は知っている。いのちの重さは比べるものじゃなく、すべてが等しく大切なことを。そこからしか、本当の未来は始められないことを。」という想いが届けられる。その想いは、コーダの「写真解説」と「あとがき」でも繰り返され、余韻をもたらす。

民俗学者の谷川健一は、彼方から叡智をもたらす存在であるマレビトを、無生物の「原（ウル）マレビト」、他界身の「前（プレ）マレビト」、仮面神の「マレビト」とし、ジュゴンを「前マレビト」であるという。

本書は、いのちをみつめるまなざしを通して、畏敬の念を忘れていないかと呼びかけてくる。沖縄では、ジュゴンを「ザンの魚（いお）」と称し、恐れ敬う対象とみなしてきた。ジュゴンの餌となるウミヒルモ海草藻場の砂地には「ザンノナミダ」という滴型で半透明の小さな二枚貝が息づいている。今、私達がなすべきことは、様々な姿をまとった「太古からの物語」をジョイントアテンション（共同注意）することではないだろうか。

ブックトークのテーマを「平和教育的アプローチ」で設定するにあたり、「いのち」「祈り」「共に」というキーワードを考えた。基地問題に揺れる沖縄にあって、平和教育は基地反対へと直結しがちだが、学生達には、多角的視点からの平和観を育みたいと考えている。そのために、どんな作品をどのように読み込むかが重要になってくる。

この写真絵本には、海の生き物の多様性をみつめるまなざしと、基地建設により翻弄される人間の営みの多様性が、写真と文章で表現されている。また、ジュゴンを、単なる基地反対の象徴ではなく、民俗学的な観点や神話的な観点から取り上げる視点は、他に類をみない。さらに、絵本という形式を取ることで、広い読者層に受け入れられるだけでなく、「共同注意」²⁾を行うことができるなど、様々な要素により、ブックトークのメイン作品としてふさわしいと考える。

作品の論理構造の分析を行うにあたり、単なる起承転結ではなく、音楽用語の「ソナタ形式」³⁾に当てはめることで、聴き手に対するインパクトを狙った。ソナタ形式の特長として、提示部と再現部に2つの主題が表現される。そのことが、生き物の多様性と人間の営みという2つの主題を持つ、この作品の論理構造を説明するのに最適であると考えた。

2つの主題を読み解く鍵になる文章として、「自然は、ただそこにあるのではなく、僕たち人間がそうであるように、小さな生命も、大きな生命も、みんなそれぞれの物語をもっている」、「自然の中になると『違うことと、同じこと』その両方を大事にしたくなる」、「僕は知っている。いのちの重さは比べるものじゃなく、すべてが等しく大切なことを。そこからしか、本当

の未来は始められないことを。」という3つの文章を選んだ。ブックトークのパフォーマンスで、この3つの文章を朗読することにより、作品のテーマと同時に、ブックトーク全体のテーマへの理解を促すことができる。さらに、朗読に加えて、聴き手と共に群読をするパフォーマンスを取り入れることができれば、ブックトークの参加者全体で、読書の身体化を体験することができる。

ブックトークのメイン作品と関連作品を繋げるキーワードとして、「ジュゴン」を設定すると、絵本以外に、民俗学的な文献への展開もできる。たとえば、民俗学的な「マレビト」論と関連づけて、ジュゴンを「前（プレ）マレビト」であると紹介することで、「ジュゴンに会う」ということが、単なる生物としてのジュゴンと会うという出来事を超えた深い意味を帯びていることを伝えることができる。筆者は何と出会ったのか、ということテーマとしながら、参加者同士の対話的思考を深める活動への展開もできる。さらに、「ジュゴン」を琉球方言としての「ザン」と結びつけ、「ザンノナミダ」という貝を紹介しながら、生物多様性へ意識を向けることもできる。ブックトークは、「平和」についての対話的思考を深めるトポス（場）となる可能性を秘めている。

書評レベルのメイン作品の読解は、大学生を対象としたブックトークには必須であるが、誰を対象とするブックトークにおいてもきちんとなされる必要がある。対象者の年齢や興味・関心等、聴衆分析を行い、どのように提示していくかを変えていけばよいのである。

おわりに

この研究ノートでは、読書を軸とした多層的な言語教育を構築するにあたり、ブックトークの教育的可能性を示した。昨今の教育界では、読書のエンゲージメントを促す取り組みとして、「読み聞かせ」や「ビブリオバトル」、「読書のアニメーション」などが、ひとつのブームのように展開されてきた。その中で、新しく注目され始めているのが、「ブックトーク」である。筆者は、「ブックトーク」は、「読み聞かせ」や「ビブリオバトル」、「読書のアニメーション」と並列ではなく、それらの活動を包含するものであると考えている。さらに、「読書教育」「プレゼンテーション教育」「文章リテラシー教育」「平和教育」の教育的アプローチにより、多層的な言語教育を構築できると期待している。これから、言語教育の実践の中で研究を深めていきたい。

【注記】

- 1) 京都大学の研究室での文献輪読会、研究所読書会から始まった、ルールに基づいた知的書評ゲーム。パフォーマーは、1冊の本を5分間紹介し、2分間の質問を受ける。審査委員は「読みたくなかった本」に投票し、チャンピオン本を決定する。各地で広く行われ、読書のエンゲージメントを促す役目を果たしている。
- 2) ジョイントアテンション。対象に対する注意を他者と共有することをいう。共同注視と混同されがちだが、対象物をお互いに認識しあっていると理解しているか否かで共同注視とは異なる。
- 3) ソナタ形式とは、古典派ソナタ（交響曲、協奏曲）などの第一楽章あるいは、終楽章で多くもちいられる楽曲の形式の一つ。提示部、展開部、再現部、コーダからなり、二つの主題が、提示部と再現部に現れる。

【引用・参考文献】

今泉真也 (2018) 『ジュゴンに会った日』 高文研

松岡享子 (2018) 「ブックトークの意義とその効果的方法」東京子ども図書館『ブックトークのきほん』TCLブッ

クレット

宮下孝広 (2018) 「地域活動における読み聞かせが豊かな生涯発達を導く」『歌と絵本が育む子どもの豊かな心』

田島信元、他編 ミネルヴァ書房

高橋麻衣子 (2012) 「読解能力の発達における読み聞かせの有用性—聴解と読解での理解成績とわかりやすさ

の評定の比較から」『読書の科学』第54巻第3号・4号 pp.89-102

ウィリアムH.ティール (2019) 「国際的にみた読書教育」『読書教育の未来』日本読書学会編 ひつじ書房

pp.341-349

上原明子 (2005) 「沖縄県における小・中学校の『読み聞かせ』活動の現状と課題」『沖縄キリスト教短期大学

紀要』33 pp.41-55

上原明子 (2006) 「『自由への読書』のための基礎的研究」『沖縄キリスト教短期大学紀要』35 pp.69-83

上原明子 (2016) 「青年期の朗読教育」『沖縄キリスト教短期大学紀要』44 pp.49-62

上原明子 (2018) 「青年期の文章リテラシー」『沖縄キリスト教短期大学紀要』47 pp.31-48

脇明子 (2005) 『読む力は生きる力』岩波書店